

次の文章は、野間宏の小説『顔の中の赤い月』の一節である。敗戦直後のすさんだ世の中、東京に住む北山年夫と堀川倉子とは同じビル内に勤める縁で知り合い、ひかれ合うものを感じた。しかし、倉子は最愛の夫を戦争で失った痛手から立ち直ることができず、年夫は南方の戦地で苦しい行軍のさなかに同僚の中川二等兵を見殺しにせざるをえなかった記憶から逃れることができない。二人は相手の苦しみを理解しながらも、おたがいにそれ以上の深い人間関係を作り出せないでいる。これを読んで、後の設問に答えよ。

少しく息づまるような空気が二人の間に生まれていた。北山年夫は、彼の左の吊革にぶらさがっている堀川倉子の姿の中から、何か一種の誘いの空気が流れてるのを感じていた。

「堀川さんとは、降りてから遠いのでしょうか？」と彼はしばらくして言った。

「ええ。」彼女は真直ぐ前を見たまま答えた。

「何分位？」

「十五分程かかりますの。」

「それじゃあ。危険ですね。」

「ええ。」彼女は頸をふった。「この間も、近所の方が襲われましたのよ。でもそのときはパラソルだけですんだんですけど。」

「送りましょうか？」と彼は言った。彼女は黙って答えなかったが、彼は彼女の顔が静かに淋しげに横に動くのを見た。そして二人はまた、互いの心をはなればなれのものにして、立っていた。

目黒、渋谷をすぎ新宿についた。北山年夫は堀川倉子を家まで送りとどけようかどうかと迷いながら彼女と共に中央線のプラットホームまであるいて行つた。

「送りましょうか？」と彼は再び言った。が彼女は相変わらず黙っていた。

電車はがらんと空^すいていたが、二人は入口のところに向かい合って立っていた。彼は窓から吹き込む風が、彼女の頸の辺り迄^{まで}たれかかっている髪の毛を、動かしているのを見ていた。そして幾らか左に傾けた小さな体が、頼りなげな存在を、自分の前にとどめているのをみていた。彼は彼女が遂^{つい}にはこの敗戦の世を、生きることができないのを感じて^{いた}。『そのうちに食えなくなるの

知れない。とにかくその斑点は彼の心をこまかくゆすつた。彼はその左の眼の

上にある小さな斑点の存在をはっきり確かめたい衝動にかられて彼の視力をこへ集めた。彼はその斑点をみつめた。しかし彼の心を乱すのは彼女の顔の上のその斑点ではなかった。そして彼は自分の心の中のどこか片隅に一つの小さい点のようなものがあるのを感じた。そしてその心の中にある斑点のようなものが何を意味するのか、彼には既に判^わっていた。彼はじつと心の内のその斑点のある辺りをみつめた。と彼は自分の心の中の斑点が不意に大きくなり、ふらんでくるのを認めた。それは次第に大きくなり、彼の眼の方に近づいてきた。

それは彼の眼の内側から彼の眼の方に近づいてきた。それは彼の眼の方に近づいてきた。『ああつ。』と彼は心の中で言った。彼は堀川倉子の白い顔の中で、その斑点が次第に面積を^{ひろ}げられるのを見た。赤い大きな円いものが彼女の顔の中心に昇ってきた。赤い大きな円い熱帯の月が、彼女の顔の中に昇ってきた。熱病

病んだほの黄色い兵隊達の顔が見えてきた。そして遠くのひ列をみたした。隊の姿が浮かんできた。

「ごーつという車輪の響きが、北山年夫の体をゆすつた。そして一俺はも歩けん。」という魚屋の中川二等兵の声が、その響きの中から、きこえてきた。

「俺はもう手を離す、手を離す。」ごーつと車輛の響きが、北山年夫の体の底（底）まで響いてきた。沸騰したあつちものが彼の体の底から湧き上がってきた。「」

「彼は中川二等兵の体が、自分のもとをはなれて死の方へつ
すぞ、離すぞ。」

すすんで行くのを感じた。中川二等兵の体を死の方へつきなす自分も、電車はごうと音をたててトンネルをはなれた。北山年夫は、自分の体の

の方からわき上がってくる暗い思いをじつと堪えていた。「仕方がない。仕方がない。俺は俺の生存を守るために中川を見殺しにしたのだ。俺

生存のために。俺の生存のために。しかし、それ以外に人間の生き方はない。

はないか。』彼はしずかに自分の心をおさえて考えつづけた。『とうしようか。』

態に置かれたならば、やはり俺はまた、同じように、他の人間の生存を見送る人間なのだ。たしかに俺は、いまもまだ、俺の生存のみを守っている人間なのだ。

すぎないのだ。そして俺はこのひとの苦しみをどうすることも出来はしない。

彼は彼女の白い顔の軒享の口から「俺はここのひとの生存の中にはいることには」にふきつけてくるのを感じた。

だ……今月から少し給料がよくなるようだが、すべては、食費にいつてしまうのだから……このひとの会社にしても同じことだろう……』そして彼の眼の前の彼女の体が、次第に容積を減じ生命の充溢（じゅういつ）を失い、どこかへ、粉のようにとびちってしまうかのように想像する。

彼には既に彼女に言うべき言葉がなかった。彼は、自分の口から如何なる言葉が出ようと、それがこの前にいる彼女の心の底にとどくことがないのを感じていた。このひとの中にはたしかに大きな苦しみがあるのだ。そしてその苦しみがこの小さな女を圧倒しおしつぶそうとしているのだ。しかしながら、俺は、この人のその苦しみにふれることができない。俺は何一つ彼女のことを知りはない。俺は俺の苦しみだけを知っているだけで俺の苦しみだけを大事にもっているだけで……ただそれだけで……

北山年夫は堀川倉子が顔を上げて彼の方に眼を向けるのを見た。ほの暗い空間をすかせて白い彼女の顔が彼の前に浮いている。彼は彼女のその顔に真直ぐな目を据えていた。……この顔の向こうには、たしかに戦争のもたらした苦しみの一つがあると彼は思った。①彼は如何にしても、彼女のその苦しみの中にはいつて行きたいと思うのだった。もしも彼のような人間の中にも、尚、いくらかでも真実とまことが残っているとするとするならば、それを彼女の苦しみにふれさせたいと思うのだった。……そのように二つの人間の心と心とが面と向かつて互いの苦しみを渡し合うことがあるならば、そのように、二人の人間が互いの生存の秘密を交換し合うということがあるならば、そのように二人の男と女とが、互いの真実を示し合うということができるならば……それこそ、人生は新しい意味をもつたろう。……しかし、彼にはそのようなことは不可能のことだと思えるのだった。

電車は、既に彼女の降りる四ツ谷に近づいていた。彼は尚も眼を据えたまま彼女の白い顔をみつめつづけた。と彼はふと彼女の白い顔の隅の方に何か一つ小さい斑点はぐくみがついているのを認めた。そして彼の心は奇妙にその斑点のために乱れ始めた。それはほとんどあるかなきかを判定することさえ困難なほどの、かすかな小さな点であつた。或いはそれは、何か煤煙ばいえんか埃ほこりによつてできたものであつたかもしれない。或いは白粉おしろいの下からすいてみえる黒子ほくろであつたかも

はしない。俺は俺の生存の中にしかないのだ。』そして彼は自分が彼女の心の息吹の中にあるものにぴたりふれることのできないことを感じた。『できはしない！ 他人の生存をどうすることもできはしない！ 自分の生存のみを守っている人間が、どうして他人の生存を守ることが出来よう。』と彼は考えていた。

電車は四ツ谷についた。電車はとまった。ドアが開いた。彼は堀川倉子の顔が彼を眺めるのを見た。彼女の小さな右肩が、彼の心を誘うのを見た。『家まで送りとだけようか、どうしようか。』と彼は思った。『できない、できない。』と彼は思った。

「さようなら。」と彼は言つて顔をさげた。
「ええ。」彼女は反射的に顔を後ろに引いた。そして③苦しげな微笑が彼女の顔

「浮かんた。」

彼女が降り、戸がしまった。電車が動いた。彼は彼女の顔がガラスの面から、車内の彼をさがしているのを見た。そしてプラットホームの上の彼女の顔が彼から遠ざかるのを見た。彼は破れた硝子窓が彼女のその顔をこするのを見た。彼の生存が彼女の生存をこするのを見た。二人の生存の間を、透明な一枚のガラスが、無限の速度をもつて、とおりすぎるのを彼はかんじた。

(注) 危険ですね…敗戦直後の混乱した社会状況を反映させた言葉。

問一 線 a と c の語句は、本文中ではどのような意味に使われているか。

最も適当なものを次の各群のAから一つずつ選び、記号で答えよ。

ア 部分的に暗い電車の中
イ ぼんやりと暗い電車の中

a
ほの暗い空間
ウ まっ暗な電車の中

a
ほの暗い空間
ウ まっ暗な電車の中

工　　ときどき暗くなる電車の中
才　　うす汚れた電車の中

オ
うす汚れた電車の中

183

- ア 心がせきたてられて
イ 気持ちが動揺して
ウ 思いが向かって
エ 精神が高ぶって
オ 意識がうつろになつて
- 「ア」
- 「エ」
- 「イ」
- 「ウ」
- 「オ」

問二 線①「彼は如何にしても、彼女のその苦しみの中にはいつて行きたいと思ふのだった」とあるが、なぜ「苦しみの中にはいつて行きたいと思ふ」のか。その説明として最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

- ア おたがいを問いつめて、過去の罪を告白し合うことが、人間としての真実の生き方であると思つたから。
- イ 相手に対する真実の気持ちを語り合うことによって、おたがいの愛情を深めることが必要であると思つたから。
- ウ 戦争が残した彼女の心の苦しみを引き受け真実を語り合うことで、新たな生き方を見いだしたいと思つたから。
- エ 二人の男女が生活をともにすることで、戦争がもたらしたおたがいの苦しみを忘れることができると思つたから。
- オ 彼女の心の苦しみは本人にしか理解できないが、彼女の生存だけではどうしても守りたいと思つたから。

問三 線②「何か一つ小さい斑点」、③「心の中にある斑点」、④「赤い大きな円い熱帯の月」、⑤「沸騰したあつちいもの」を含む二つの段落には、表現上どのような手法がみられるか。その説明として最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

- ア 年夫と倉子は、戦争のもたらしたそれぞれの苦しみの中に生きており、戦争の苦しみを内に抱えた彼女に彼はひかれていた。しかし、彼は、他人を見殺しにした戦場での記憶が彼女の顔の斑点を通してよみがえってきて、他人の生存を守れないことを自覚させられたので、送ることを断念した。
- イ 年夫と倉子は、戦争のもたらしたそれぞれの苦しみの中に生きており、その苦しみについて話し合い、通勤電車が一緒ということもあって、おたがいに好感を持っていた。しかし、彼は、他人を見殺しにした戦場での記憶が彼女の顔の斑点に誘われて出てきたので、送ることを断念した。
- ウ 年夫と倉子は、戦争のもたらしたそれぞれの苦しみの中に生きており、戦争の苦しみを内に抱えた彼女に彼はひかれていた。しかし、彼は、他人を見殺しにした戦場での記憶が彼女の顔の斑点を通してよみがえってきて、他人の生存を守れないことを自覚させられたので、送ることを断念した。
- エ 年夫と倉子は、戦争のもたらしたそれぞれの苦しみの中に生きており、戦争の苦しみを内に抱えた彼女に彼はひかれていた。しかし、彼は、他人を見殺しにした戦場での記憶が彼女の顔の斑点を通してよみがえってきて、他人の生存を守れないことを自覚させられたので、送ることを断念した。
- オ 年夫と倉子は、戦争のもたらしたそれぞれの苦しみの中に生きており、戦争の苦しみを内に抱えた彼女に彼はひかれていた。しかし、彼は、他人を見殺しにした戦場での記憶が彼女の顔の斑点を通してよみがえってきて、他人の生存を守れないことを自覚させられたので、送ることを断念した。

問五 線③「苦しげな微笑」とあるが、その説明として最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

- ア 倉子は、年夫の愛を信じながらも、彼が戦争の悲惨な傷跡のせいで他人を愛せなくなったことを感じ取ってしまった。そのために、彼女は彼に対してどのように応じてよいかためらっている。倉子のそのためらいの気持ちに「苦しげな微笑」となつて現れた。
- イ 年夫は、倉子の苦しみとのふれあいを求めながらも、それを断念して彼女の期待を裏切ることになった。だが、彼は戦争の傷跡の深さを感じ、それをどうすることもできないと感じていた。そのような年夫に対する倉子の複雑な心情に「苦しげな微笑」となつて現れた。
- ウ 倉子は、戦争のもたらした苦しみから抜け出すきっかけとして、年夫との新しい意味をもつ生活を期待した。だが、彼は急に態度を変えてしまった。倉子の「苦しげな微笑」は、彼の態度をどう理解してよいのかわからずに苦しんでいる様子を表している。
- エ 年夫の再三にわたる誘いに対して、倉子は長いためらいの末、ようやく戦後の自分の生存を彼との新しい生活に託そうと思ひ立った。しかし、

ア 倉子の顔の斑点と年夫の心の中の斑点とを合体させ、そこに赤い大きな円い熱帯の月を空想させるといふように、円い形という共通項を使って内的なことを視覚化する幻想的な手法がみられる。

イ 倉子の顔の斑点と年夫の心の中の斑点とを関連づけ、そこに戦場での出来事を再現させていくといふように、具体的なものをとおして内的なことを表現していく象徴的な手法がみられる。

ウ 倉子の顔の斑点と年夫の心の中の斑点とを重ね、そこに過去の妄想を徐々に映し出すといふように、具体的なものを手掛かりにして、隠された心の謎を少しずつ明らかにしていく推理小説的な手法がみられる。

エ 倉子の顔の斑点を年夫の心の中の斑点で包み込み、そこに過去の経験の意味を鮮明にふくらませるといふように、外的なものより内的なことを重視して表す誇張的な手法がみられる。

オ 倉子の顔の斑点を年夫の心の中の斑点に結びつけることで、そこに戦争が残したもう一つの傷跡を確かめるといふように、直感を頼りに内的なことと外的なものとの関連づける感覚的な手法がみられる。

問四 線②「『さようなら。』と彼は言つて」とあるが、北山年夫がこの言葉を用いてしまふまでの心理はどのように描かれているか。その説明として最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

- ア 年夫と倉子は、戦争のもたらしたそれぞれの苦しみの中に生きており、彼は彼女が自分をある程度理解していることがわかつていた。しかし、彼は、他人を見殺しにした戦場での記憶が彼女の顔にまでつきまとつたので、他人の生存を守れない自分を反省し、送ることを断念した。
- イ 年夫と倉子は、戦争のもたらしたそれぞれの苦しみの中に生きており、彼は彼女がその苦しみから救ってもらいたいと願っていることを知っていた。しかし、他人を見殺しにした戦場での記憶が彼女の顔の中に斑点として現れたので、彼は彼女を救うことは不可能だと思ひ、送ることを断念した。
- ウ 年夫と倉子は、戦争のもたらしたそれぞれの苦しみの中に生きており、おたがいの内面の傷はよく理解しあつていた。しかし、彼は、他人

その矢先に彼から断念の意志を告げられた。倉子の「苦しげな微笑」は、彼女の呆然とした様子を表している。

オ 年夫は、倉子からの応答を待ち切れず、ついに別れを告げた。これに対し、彼女は、ためらいながらも彼との新しい生活に踏み出そうと決断していたので、別れを告げられたときにはその決断が既に遅いことを知った。倉子の「苦しげな微笑」は、彼女のそのような苦い思いを表している。

問六 本文の特色を説明した文としてふさわしくないものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

- ア 過去の暗い思い出にとらわれ、新しい自分の生き方に踏み込んでいけないという心理的な葛藤を描くために、主人公の過去と現在とを二重写しにする内面描写が効果的に使われている。
- イ 自分の生存を守るために他人を見殺しにするという人間のエゴイズムが、戦争という極限状況を回想する中で印象深く表現されている。
- ウ 「生存」という言葉をキー・ワードにして、人間の最も根源的な問題を扱っており、人間のあるべき生き方を執拗に追求しようとする倫理的な内容が、仮定や反復や問いかけなどを用いた独特の表現技法によって伝えられている。
- エ 登場人物は自分自身の生存を守っていくことに精一杯な人間として描かれており、そのために他人との触れ合いを拒絶するような生き方を肯定するが、その生き方が半ばあきらめを込めて詠嘆的に表現されている。
- オ 心のつながりを持ってない男女の悲劇を通して、日本人に刻み込まれた戦争の傷跡を典型的に表しているが、それが、主人公のとまどいたためらう内面から説明されている点に表現の特色がある。